JCOAL Magazine

1

JCOAL Magazine 第 189 号 平成 28 年 6 月 29 日

TOPIC 目次

- アセアン石炭フォーラム(AFOC)参加報告
- 明治日本の産業革命遺産-世界遺産登録記念-特殊切手の発行
- 連載コラム「世界各地の石炭博物館めぐり」
  - 常磐炭田を知るために(いわき市石炭化石館ほるる)
  - ワルシャワの博物館めぐり
- コロンビアの一般炭輸出量は 3 ヶ月間増加
- SUEK とロシア鉄道との合意(ロシア)
- Freightliner PL の新機関車導入(ポーランド)

■アセアン石炭フォーラム(AFOC)参加報告

JCOAL は、ASEAN 高級官僚会合(Senior Officials Meeting on Energy/SOME)の下にエネルギー分野域内協力強化及びマルチおよびバイベースでのエネルギー協力推進の事務局であるアセアンエネルギーセンター(ACE)との間で継続的に協力を展開している。アセアン石炭フォーラム(AFOC)は石炭分野の域内協力を進めるために ASEAN 政府間で正式に設置された組織で、毎年開催される理事会にはオブザーバーとして日本も招待され、JCOAL は例年参加している。

今年度(第14回理事会)は、カンボジア政府が主催国となりプノンペンで会議を開催。経済産業省(METI)石炭課斎藤課長補佐の出席を得て、石炭火力に関する国際的な議論の動向を意識しつつ、ASEAN 各国が目指す電力安定供給について、日本の知見と経験を共有しながら石炭のクリーンな利用に取り組んで行く方途について、活発な議論が交わされた。

以下にその概要を報告する。

開催日: 2016 年 6 月 8 日

出席: カンボジア政府資源エネルギー省エネルギー総局長及び資源総局長並びに各国代表団(局長-部長レベルが団長)60 名程度。

＜開会セッション＞

主催国政府を代表し Mr. Victor Jona, Director General, Energy, MME が挨拶、昨年度の議長(タイ)、副議長(インドネシア)の挨拶後、議長(ベトナム)、副議長(カンボジア)が席についた。ベトナムは長年 AFOC ベトナム代表団の中心的存在である Dr. Kieu Kim Truc VINACOMIN 部長が、カンボジアの副議長はもう 1 名の DG である Mr. Yos Mony Rath, Director General, Mineral, MME が務めた。

ACE Dr. Sanjayan 所長は挨拶の中で、エネルギー融通(connectivity)、安定確保(security)、アクセシビリティ(accessibility)が重要。そのために(1) クリーンな石炭火力発電、(2)社会的受容性の形成、(3)域内石炭融通のし

一般財団法人 石炭エネルギーセンター 〒105-0003 東京都港区西新橋 3-2-1
Daiwa 西新橋ビル 3F 電話 03(6402)6100 FAX03(6402)6110
購読のお申込みは⇒jcoal_magazine@jcoal.or.jp

くみ、(4)関連政策研究、(5)石炭データベースの構築・管理、(6)石炭に関し ASEAN の Center of Excellence を確立する、とした(以上域内長期協力計画である APAEC(ASEAN Plan of Actions for Energy Cooperation)による基づく論理立て)。いずれの開会セッションスピーカーも、以下の点を強調している印象。

- ASEAN は各国とも、急成長を続けて来た。
- 急成長と並行し、(意識の高まりもあり)石炭火力開発については、環境影響を憂慮し一般国民が反対する傾向にある。
- 明らかなのは、非効率的な利用はもはやできず、高効率利用と環境に配慮したエネルギー利用、石炭火力開発ができるかどうか、が問われているという点。エネルギー供給・利用をいかに持続的なものとするか(sustainable mode of energy supply utilization)、である。

なおカンボジア政府、議長、副議長からは開催を支援した METI、JCOAL に対する謝辞が述べられた。

議長(ベトナム)、副議長(カンボジア)

カンボジア代表の挨拶

＜第 1 セッション: AFOC 各国代表機関の活動＞

冒頭、ACE が昨年度 AFOC での議論(昨年度からカントリーレポートがなく、AFOC 各国代表機関の活動についての自主報告及び APAEC の石炭関係部分の案に関する議論が主であった)についてレビュー。続いて、今年度は基準の見直し等を行った(表彰は隔年)ASEAN 石炭賞審査会(BOJ)について、報告があった。

各国代表機関による自主報告では、最初にミャンマー(今年度 11 名参加)が、ミャンマーの石炭資源及び石炭火力開発の現況について説明した他、以前より計画しているミャンマーでの石炭事業ラウンドテーブルの開催の必要性を訴えた。同ラウンドテーブルについては昨年度も計画中とのことであったが、政権交代等の影響もあったのか内容検討が進んでおらず、今回具体的な内容は提示されるには至らなかった。しかしながら、同国からは今回総勢 11 名の代表団が参加しており取り組みへの関心は決して低くないことから、今後同会議の開催に向けて検討が進む可能性も十分あると思われる。

続いてインドネシアから、昨年度開催された CCS/U Workshop の結果報告(JCOAL からは橋本技術開発部長

が出席、発表）が行われるとともに、一昨年度に続き今年度計画されている CCT ワークショップの開催予定の説明があり、JCOAL に対しても発表要請があった。→詳細確認後、参加を検討する旨を回答。

この他、予定外であったがインドネシアが担当している ASEAN 石炭データベース（資源関係のみ、石炭利用は対象外）の構築取り組み状況について説明があった。

＜第 2 セッション： パートナー機関との協力＞

CCS に関し ACE のパートナー機関である GCCSI（グローバル CCS インスティテュート）は昨年度に続きビデオ・プレゼンテーションのみでの参加であったことから、本セッションは実質上日本との協力についての議論が主となった。

冒頭、METI 石炭課斎藤課長補佐が石炭火力をめぐる国際的な議論の動向を踏まえた上で、ASEAN での著しい石炭需要増を踏まえ、排出削減はもちろんであるがそれにとどまらない環境配慮がされた石炭火力とするためにどのような技術導入が求められるか、について各国の環境基準比較表や高効率化に向けた技術ロードマップを用いつつ、丁寧に説明された。IGCC については、日本での商業化展開を踏まえ、ASEAN においてもその環境調和性・高効率性から現実的な選択肢になる、と強調された。

- METI 発表に対し、環境基準の遵守状況への高い関心が示された（タイ）。また、OECD での議論の成果が石炭火力を否定するのでなく高効率であれば支援の可能性がある、となったことについて安堵する声もあった（フィリピン）。
- 褐炭の USC への適用性についても質問があり（ラオス）、斎藤課長補佐から一般的には IGCC の方が褐炭利用に適していると言える、と回答した。
- これについてはインドネシアから、IGCC では経済性が確保できないような規模については乾燥、改質、ガス化等の対応も有効である、との補足があった。
- JCOAL の発表では、ACE との協力の下で実施している CCT ハンドブック第 2 版の作成と招聘プログラムについて説明、あわせてハンドブックに継続掲載予定の諸技術の紹介を行った。技術情報は配布しなかったが、少しでも吸収しようと関係者がスライド写真を熱心に撮る様子が会場のあちこちで見られた。

AFOC 代表団との集合写真

第 3 セッションは、APAEC についての ASEAN 内討議が予定されていたため退席したが、その後 ACE からの連絡により、APAEC の主要項目と位置づけられているクリーンな石炭利用に関しては、継続的な取り組みに異論はなく、今後も協力をお願いしたい、との報告があった。

ASEAN 諸国はそれぞれの国により事情が異なるので、各国の諸事情を考慮した対応が重要であることを改めて認識した。

気候変動対策クリーンコール事業の下、JCOAL が進めている対 ASEAN（マルチ）協力の中で、招聘と並ぶもう 1 本の柱が CCT ハンドブック（ASEAN CCT Handbook for Power Plant）第 2 版の作成である。現在、関係企業のご理解、ご協力の下に JCOAL にて改訂作業を進めている。同書は、ASEAN でのクリーンな石炭火力開発に日本が貢献可能な技術の紹介を旨としており、今回の改訂では、小容量（300MW クラス）の SC、USC の紹介や、環境設備でも極低排出技術だけではなく経済性や O&M を考慮した選択肢、説明も紹介するように考えていきたい。

事業化推進部　小澤　政弘、　山田　史子

■明治日本の産業革命遺産-世界遺産登録記念-特殊切手の発行

日本郵便株式会社（東京都千代田区、代表取締役社長　髙橋　亨）は、世界遺産シリーズ第 9 集として、「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」を題材とした特殊切手を7月８日に発行すると発表いたしま

した。世界遺産をデザインした 82 円切手を 10 枚配置したシート1枚です。シート背景は世界遺産に登録された軍艦島です。石炭に関係する各位は是非ご留意ください。

https://www.post.japanpost.jp/kitte_hagaki/stamp/tokusyu/2016/h280708_t.html

切手デザイン	丸山 智(切手デザイナー)
版式刷色	オフセット 6 色
発行枚数	900 万枚(90 万シート)
販売場所	全国の郵便局等

世界遺産シリーズについて

人類共通の文化遺産および自然遺産の国際的保護を図る目的で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」に基づき登録された、日本の世界遺産を題材として発行するシリーズ切手です。
過去にも「世界遺産シリーズ」としてシリーズ切手を発行しており、現在のシリーズは、2004(平成 16)年以降に新しく登録された日本の世界遺産を題材として、2006(平成 18)年以降第 1 集から第 8 集までを発行しています。
「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」について

「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」は、西洋から非西洋への産業化の移転が成功したことを証言する産業遺産群により 構成されています。19 世紀後半から 20 世紀の初頭にかけ、日本は工業立国の土台を構築し、後に日本の基幹産業となる造船、製鉄・製鋼、石炭と重工業にお いて急速な産業化を成し遂げました。

産業化の歩みは蘭書片手の鉄製大砲鋳造への挑戦や、洋式船の模倣から始まりました。次に、西洋技術の導入が行われ、技術の運用による専門知識の習得を行 い、明治の後期には、国内に人材が育成され、国内需要や社会的伝統に合った西洋技術を積極的に導入し、産業化を完成させました。日本は非西洋諸国で初めて 産業革命の波を受容し、僅か 50 年余りで植民地にならずして自らの手で産業化を成就しました。明治日本の産業革命遺産は世界史における類い稀な局面を証言 する遺産群です。

発行する郵便切手のデザインについて

(1) 官営八幡製鐵所 旧本事務所(非公開施設)

日本初の銑鋼一貫製鉄所となった官営八幡製鐵所の創業 2 年前の 1899(明治 32)年に竣工した初代本事務所は、中央にドームを持つ左右対称形の赤煉瓦建造物で、長官室や技監室、外国人顧問技師室などが置かれました。

(2) 遠賀川(おんががわ)水源地ポンプ室(非公開施設)

官営八幡製鐵所第一期拡張工事に伴う工業用水を確保するために、八幡から 11.4km 離れた遠賀川沿いに設置された取水・送水施設で 1910(明治 43)年に操業を開始しました。

(3) 萩反射炉、(4) 旧集成館(しゅうせいかん) 反射炉跡、(5) 韮山(にらやま)反射炉

幕末、海防の危機感から大砲鋳造のため全国各地に建設された反射炉十一基の内、現存する三つの反射炉で、藩士たちの西洋科学への挑戦と試行錯誤の実験を物語る遺構です。

(6) 橋野鉄鉱山

大島高任(おおしまたかとう)が築いた現存する日本最古の洋式高炉跡です。当時国内最大の製鉄所で、鉄鉱石の採掘、運搬、製錬に至る製鉄工程を総合的に把握できる遺跡が残っています。

(7) 三重津(みえつ)海軍所跡

幕府から長崎警備を任されていた佐賀藩は、長崎から持ち帰った西洋技術の情報を基に、日本の技術で建造され、国内で現存する最古の乾船渠 (かんせんきょ)を建造しました。佐賀藩は、ここで外国から購入した洋式蒸気船の修理や藩士の訓練を行い、船舶に関する洋式技術の獲得と実践の拠点としました。

(8) 小菅修船場跡(こすげしゅうせんばあと)

日本で初めての蒸気機関を動力とする曳揚げ装置を装備した洋式船台です。曳揚げ装置を格納する小屋は現存する日本最古の本格的煉瓦造建築で、扁平な煉瓦は、その形状からこんにゃく煉瓦と呼ばれています。

(9) 三角(みすみ)西港

明治政府の殖産興業政策のもと、初めて手掛けた近代港湾築港事業で明治の三大築港の一つ(他港は宮城県野蒜(のびる)港、福井県三国港ですが、現在でも当時の港湾施設が良好に残るのは三角西港のみ)です。

(10) 三池港

三池炭を大型船に積載し国外へ輸出するために 1908(明治 41)年に築港しました。はばたく鳥のようなハミングバード(はちどり)の形状を保ち、現在も重要港湾として機能しています。

(背景)端島(はしま)炭坑

明治後期の高島炭鉱(高島、端島による海底炭坑)の主力坑として、官営八幡製鐵所へ製鉄用原料炭を供給するなど、国内外の石炭需要を賄いました。

(参考)

「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」

http://www.japansmeijiindustrialrevolution.com/

情報ビジネス戦略部　田野崎　隆雄

■連載コラム「世界各地の石炭博物館めぐり」

常磐炭田を知るために（いわき市石炭化石館ほるる）

常磐炭田は、幕末から昭和 51 年まで首都圏で家庭や蒸気機関車などの燃料となる石炭を採掘した炭田で、東京近郊で見られた石炭のほとんどは常磐炭田産といってよいものでした。その石炭が消えて 40 年、かつての繁栄の証拠はいまや産業遺産として現地に残るばかりです。これを知る好適な場所が「いわき市石炭化石館ほるる」です。常磐炭は硫黄分を多く含み、純度の低い炭質（低品位炭）という不利な条件があり、さらに地層が激しい褶曲を受けているため、石炭層を求めて地下へとひたすら掘り下げ、高い掘削技術を要する炭鉱でした。地下水が多く温泉も湧き出すため坑内は暑く過酷な環境で、1t の石炭を採掘する のに 4t もの地下水が湧き出し、当時世界最大の排水ポンプを並べるなど行っておりました。

- 常磐線湯元駅まで東京駅から特急ひたち号で２時間ほどで、まもなく下り方面の右手に、四角い赤いやぐらが見えてきます。これが「いわき市石炭化石館ほるる」です。駅から徒歩１０分、ちょっ

とした丘を登り、館入り口に達しますと、「フタバザウルス」がお出迎えです。発掘模型は入ってすぐのところにもあります。発券場の横に立つのが片寄平蔵です。幕末から明治維新期に明石屋として横浜で常磐炭を広めることに尽力しました。このあたりは植松三十里の「燃えたぎる石」に詳しく書かれておりますので是非お読みくだされば幸いです。

- さて博物館に入りますと、常磐炭鉱の歴史と当館の関係が示されています。そうなのです、ここは炭田の湯元坑のあったところなのです。広場に出ると恐竜のお出迎えで、アンモナイトとともに中生代世界の再現です。阿武隈山地の基盤は古い古生代の地層や花崗岩なのですが、その上に中生代（特に白亜紀）にかけて、恐竜が闊歩する世界が広がり、同時に植物が繁茂して、新生代に入り炭田となることとなりました。温暖な気候のもとで石炭のもととなる植物が生育したということが実は大事なところです。
- 二階に上がりますと、学習展示室でより深い学習を行うことができます。日本や世界のどこで石炭が取れるかを見て頂き、かつての坑口の見える戸外を眺めながらエレベーターに乗り、坑道へ降ります。エレベーターではかつての炭坑夫の弁で 40 年前の炭坑の中に引き込まれます。降りた場所は炭坑の中です。模擬坑道は、まず狸掘りから始まり機械堀りとなり、炭坑の歴史をたどります。いまや皆さんの目の前から消えてしまった石炭を命がけで掘っていた時代があったのです。ついで採炭の近代化があり、最後は炭坑住宅の中へと案内されます。よき昭和の地域の生活をよび起される方も多いのではないかと思います。

出たところにあるミュージアムショップで化石や鉱物標本とともに「黒いダイヤ」や「ふらがーる」というお菓子がありますので、「じゃんがら」「石炭飴」と共にお試しください。かつて石炭のことを「黒いダイヤ」といわれたことにちなんでいます。映画「ふらがーる」はスパリゾートハワイアンズのメモリアルです。炭鉱閉山後の温排水を利用した事業地は博物館から車ですぐのところにあります。また小名浜港にある「アクアマリンふくしま」では生命誕生から進化、環境への適応を実体験できます。あわせてぜひお訪ねください。

ワルシャワの博物館めぐり

Jak się masz? ポーランドは飛行機で日本から約 12 時間くらいかかりますが、四季のはっきりした自然豊かな国です。エネルギーとして石炭が重要であり、その詳細や専門的な Guido 博物館 [1)]の内容は別途見ていただくことにして、首都ワルシャワ内で気軽に行ける世界遺産などを紹介したいと思います。私は 2008 年に開催された EuroCoalAsh という会議に、欧州石炭灰協会(Ecoba)の招待で初めて訪問して依頼ワルシャワのファンとなりました。

1. ポーランドの地理及び歴史概要

ポーランド共和国(Rzeczpospolita Polska)、通称ポーランドは、中央ヨーロッパに位置する共和制国家。欧州連合 (EU)加盟国であり、首都はワルシャワです。北はバルト海に面し、北東はロシアの飛地カリーニングラード州とリトアニア、東はベラルーシとウクライナ、南はチェコとスロバキア、西はドイツと国境を接しています。16 世紀から 17 世紀にかけヨーロッパで広大な国の1つであったポーランド・リトアニア共和国を形成していましたが。18 世紀に入り、ドイツ、オーストリア、ロシアにより国土が分割され、国家として消滅してしまいました。第一次世界大戦後の 1918 年に独立しましたが、第二次世界大戦の開始に、ナチス・ドイツとソビエト連邦から侵略され、戦後 1952 年、ポーランド人民共和国として東側諸国として独立、東側諸国の民主化とソ連の崩壊と東欧革命を経て、現在に至ります。国内にはビャウオヴィエンジャ国立公園、ヴイエリチカ岩塩坑、アウシュビッツ収容所跡などの世界遺産がありますが、ワルシャワ市内にも、歴史地区をはじめとして見所がいっぱいあります。

2. ショパンの生地ワルシャワ

ワルシャワ・ショパン空港は町の中心部から 10km ほどのところにあり、電車やバスですぐ中心部のワルシャワ中央駅に到着できます。空港の名前になっていることからわかるように、偉大なピアニストであり、作曲家であったフレドリック・ショパンが生まれ育った町がワルシャワです。ショパン博物館や聖十字架教会などゆかりの史跡が数多くありますので、音楽好きの方にはウイーンよりも興味深いのではないでしょうか？市内は地下鉄とトラム・徒歩で十分回れますので、一日券がお徳です。地下鉄・トラムは線路のないところは走りませんので、地図さえあれば迷いません。

3. ワルシャワ歴史地区

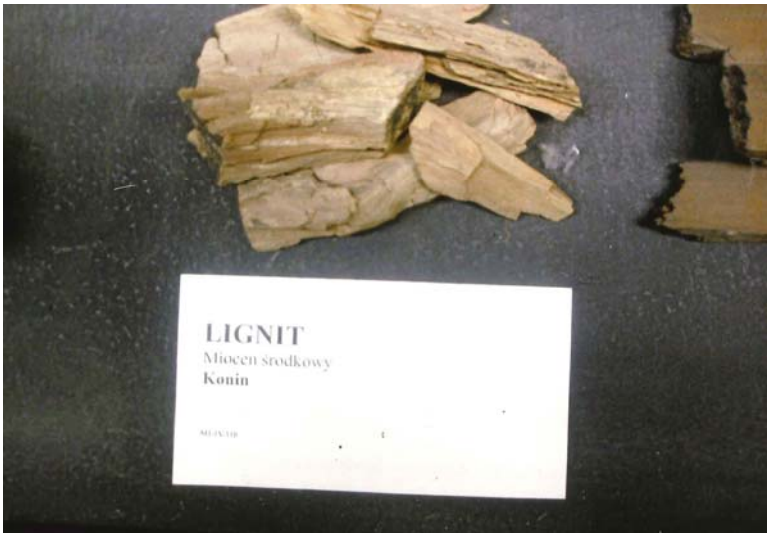
1980 年ユネスコ世界遺産に登録されたワルシャワは、第二次世界大戦で灰燼に帰した中から見事な再建をしたことに注意しなくてはいけません。昔の絵画や町の破壊を予期して人々が描いた スケッチ、写真などをもとにして、レンガのひびに至るまで丹念に修復され、見事に中世の町並みを復活させたとのことです。13 世紀末には、現在王宮のある辺りを中心として町が形成されました。1596 年にはジグムント3世 によって首都がクラクフからワルシャワに移され発展を遂げました。この当たりは旧市街にあるワルシャワ歴史博物館でわかると思います。

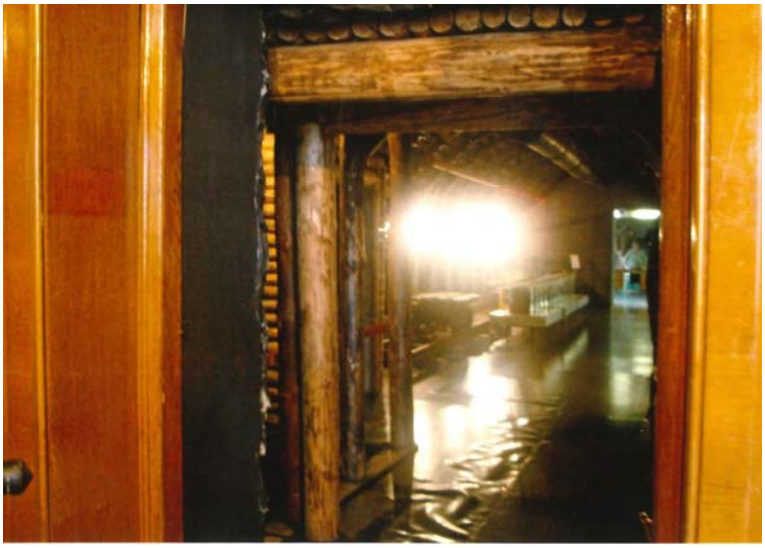
この地区に隣接してフランスに出て放射性元素の研究でノーベル賞を二度取ったキュリー夫人の博物館・天動説を唱えたコペルニクスの像がある新市街が続きます。科学の歴史に大きな足跡を残した先人の生涯を思い起こすのがよいでしょう。大統領官邸の周囲にはオペラハウスやワルシャワ大学が取り囲み、ヨーロッパの町らしい景色が続きます。

4. 文化科学宮殿(科学技術博物館)

ワルシャワ中央駅を降りて、すぐ目につく高層建築が社会主義時代に作られた、文化科学宮殿です。この 37 階建ての建物中にお目当ての科学技術博物館があります。東京の科学技術館に似ていて、自動車や通信機器の歴史を実物で展示しているのですが、ポーランド独自のものとして石炭採掘技術の展示が興味深いのでご一覧ください。

まずは国内の炭田分布、地質の説明。次いで模擬炭坑になります。削岩機や安全システムに続き、鉄鋼等への展開が分かりやすく説明されています。ポーランドにあって、今なお発電の 80%以上が石炭に依存していることを全国民が理解しているようです。褐炭(Lignite)と製鋼用の瀝青炭の違いは子供でもわかるようにしていました。同国の冬は厳しく、暖房無しには冬は越せません。知り合いのポーランド人に尋ねてみると、石炭に対する親しみもより一段のものがあるようです。





一般財団法人 石炭エネルギーセンター 〒105-0003 東京都港区西新橋 3-2-1
Daiwa 西新橋ビル 3F 電話 03(6402)6100 FAX03(6402)6110
購読のお申込みは⇒jcoal_magazine@jcoal.or.jp

5. ポーランドのお土産

博物館でも展示されているのですがバルト海沿岸の琥珀が加工されて工芸品になっています。一方トルンという天文学者コペルニクスが生まれた町の伝統銘菓、ジンジャーを使った洋菓子のピエルニキは、星形をしており、たっぷりの蜂蜜が使われており、そのピリッとした中にあるほんわかな甘さが独特です。また容器が重いですが蜂蜜(Miod)も捨てがたい。ポーランドのパン、オブヴァジャネックにつけて食べると最高です。Smacznego!

情報ビジネス戦略部　田野崎　隆雄

■コロンビアの一般炭輸出量は 3 ヶ月間増加

コロンビア一般炭の輸出量は 5 月には 740 万トンとなり、4 月に比べ 10%増加している。輸出量はこれにより 3 ヶ月連続で伸びた結果になった。輸出量を年間で比較した場合は増減のばらつきはあるものの、2015 年の 5 月と比較すると 0.7%減であった。

トルコはコロンビア炭輸入国の最大手に返り咲き、この 5 月には 160 万トンに達した。これは Platts 調べによると過去最高のレベルであった。その積荷量は昨年同月の 72.7 万トンの 2 倍以上に達し、4 月の量の 26%以上となった。

オランダへの輸出量についてもこの 3 ヶ月間で最高レベルに達し、100 万トン以上となり、4 月比では 57%増となった。ただし、年度比では 38%減となっている。これは欧州地域からの需要の活性化を意味し、欧州全体ではこの 5 月、200 万トン以上の輸入量となった。

しかし、フレートレートの増加、モンスーンの季節の到来によりインドからの需要が鈍化し始め、コロンビア-アジア間での 100 万トンに及ぶ取引は、鞘取引にシフトするような新たな貿易フローが起き始めている。韓国と中国のバイヤーはケープサイズの一般炭を受け入れている。一方、タイも 16.1 万トンの貨物を受け入れているが、インドネシアからの輸入可能量が弱体し始めたことで、バイヤーらは代替資源を探しているようだ。インドへの合計 4 つの貨物船では、およそ 50 万トンが Glencore から販売された。これは 4 月から 60%低下している。しかし今年度、コロンビアはこれまで 100 万トン以上インドに一般炭を輸出しており、年度比で 95%増を継続している。今年度の早期にインドに輸出されるコロンビア炭に関して鞘取引がオープンされたことによって、16 隻(およそ 249 万トン)の貨物がインドに輸出されることになる。

2016 年の 5 月までに、コロンビア一般炭の輸出量は年度比で 2%増加し、3,440 万トンに達している。

6/13 Platts

情報ビジネス戦略部 田中 恒祐

■SUEK とロシア鉄道との合意

ロシアの石炭会社 SUEK 社と国有企業であるロシア鉄道は、輸送効率を高める協力協定に合意した。

ロシア鉄道代表 Oleg Belozerov 氏と SUEK 社 CEO である Vladimir Rashevskyd 氏は、6 月 17 日、サンクトペテルスブルク国際経済フォーラムにおいて、同合意書にサインを交わした。これは石炭輸送の改良及びロシア鉄道の貨物輸送効率を促進することを目指すものである。SUEK 社のプレスリリースによれば、これには石炭輸出設備、港湾鉄道インフラ、積荷設備、など輸送貨物量と能力を拡大する長期開発計画が含まれている。

SUEK 社は 2015 年ロシア鉄道貨物の 7.7%を占める国内最大の鉄道ユーザーであり、ロシア鉄道と SUEK 社の共同プロジェクト開発の実施は輸送貨物の効率化のために重要であると Rashevsky 氏は述べた。

2016/6/22 World coal より抄訳

情報ビジネス戦略部 岡本 法子

■Freightliner PL の新機関車導入(ポーランド)

ポーランドの石炭、ドライバルク貨物鉄道サービス会社である Freightliner PL 社(英国のフレイトライナーグループの子会社)は、最先端開発であるディーゼルエンジン電気機関車「DRAGON 機関車」が初荷を輸送した。

この機関車は、ING リース社の融資を受けて Newag SA 社がポーランド国内で設計及び製造した最先端の非電化エンドラインとサイディング操作のためのディーゼルエンジンを搭載した 6 軸電気機関車である。

「このようなモダンな車両への投資は、鉄道のイメージ向上のための方法の 1 つです」と Freightliner Poland 社社長である Konstantin Skorik 氏は述べた。「そして検討の結果我々は DRAGON を追加のディーゼルエンジン搭載の 6 車軸電気機関車に拡張することを決めた。これはポーランドの技術製品であり、パワー、効率、人間工学、及び信頼性の中で最も高いパラメーターに特徴付けられている」と同氏は付け加えた。

公式な式典の場で DRAGON はアーネストマリノフスキーと命名された。マリノフスキーとはペルーの中心部アンデス横断鉄道に関わった優れたポーランド人鉄道エンジニア及び建設者の名前である。

「私は Freightliner Poland へ最初の DRAGON E6ACTd 6 軸機関車を公式に引き渡せた事を大変光栄に思っている。我々は車両に対する信頼性及び技術性において大幅なコスト削減を確信している。6 軸式機関車は非電化サイディング操作を可能にするデュアル電源モジュール搭載のポーランドで製造された初の機種である。」と Newag S.A の取締役会 Józef Michalik 氏は式典の場で述べた。

Freightliner グループは、英国、欧州、オーストラリア、中東へ鉄道貨物輸送のビジネス展開を行う米国 Genesee & Wyoming 社の子会社である。

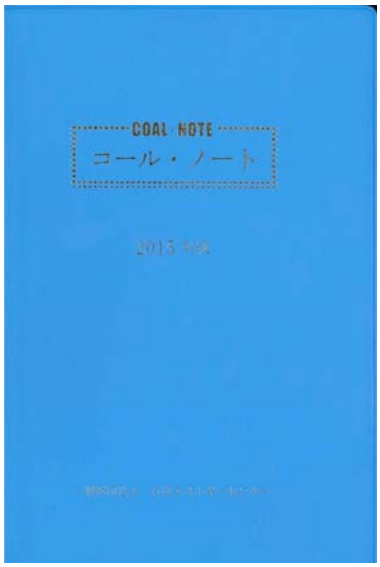
http://www.newag.pl/en/oferta/lokomotywy-elektryczne/dragon/#dane

World Coal より抄訳

情報ビジネス戦略部 岡本 法子

■JCOAL からのお知らせ

コール・ノート 2015 年版の発売を開始いたしました。



コールノートは世界主要産炭国の石炭政策をはじめ、石炭需給に関する基本情報のほか環境問題や利用技術に関する情報などを網羅しております。

ご購入に関しましてはこちらをご覧ください。

http://www.jcoal.or.jp/publication/coalNote/2015.html

クリーン・コール・デー石炭利用国際会議は

平成 28 年度で 25 回目を迎えます。日程は、9 月 7 日(水)～8 日(木)の 2 日間、翌 9 日(金)は見学会を予定しております。

詳細が決まりましたら、JCOAL web site に掲載させて頂きます。

皆様方のご参加をお待ちしております。

CCT ワークショップ 2016 開催のお知らせ

JCOAL では、CCT 最新技術動向等を議論するワークショップを本年も開催致します。

日時 平成 28 年 7 月 19 日(火)、7 月 20 日(水)
場所 発明会館
対象 JCOAL 会員企業、団体所属の方限定
参加費 無料
懇親会費 5,000 円
お申込み、プログラムは JCOAL ホームページをご参照下さい。
http://www.jcoal.or.jp/event/2016/06/cct2016.html

■『第 1 回〈次世代〉火力発電EXPO』協賛のご報告 ■

来年 2017 年 3 月、日本初の火力発電に関する国際展示会、『第 1 回〈次世代〉火力発電 EXPO』が東京ビッグサイトにて新たに開催され、JCOAL は「協賛」することに決定しましたので、ここにご報告いたします。

(主催:リード ジャパン(株) 共催:火力原子力発電技術協会)

リード社は年間 40 の産業分野で 142 本の国際見本市を開催している、日本最大の見本市の主催会社です。

http://www.reedexpo.co.jp/

『〈次世代〉火力発電 EXPO』に協力することにより、会員企業の優れた技術を発信すると同時に、クリーンな火力発電の普及、啓発につながると確信しております。

関係各社の皆様におかれましては、積極的なブース展示をお願いしたく存じます。

(※出展に興味がある方は、下記のリード社へ直接問い合わせてください)

＜展示会概要＞

発電システムから保守、プラント設備まで網羅した総合展

◆◆ 第1回 〈次世代〉火力発電 EXPO ◆◆

http://www.thermal-power.jp/

会期 ： 来年(2017 年)3 月 1 日(水)～3 日(金)

会場 ： 東京ビッグサイト

主催 ： リード エグジビション ジャパン(株)

共催 ： (一社)火力原子力発電技術協会(TENPES)

協賛 ： (一財)石炭エネルギーセンター(JCOAL)

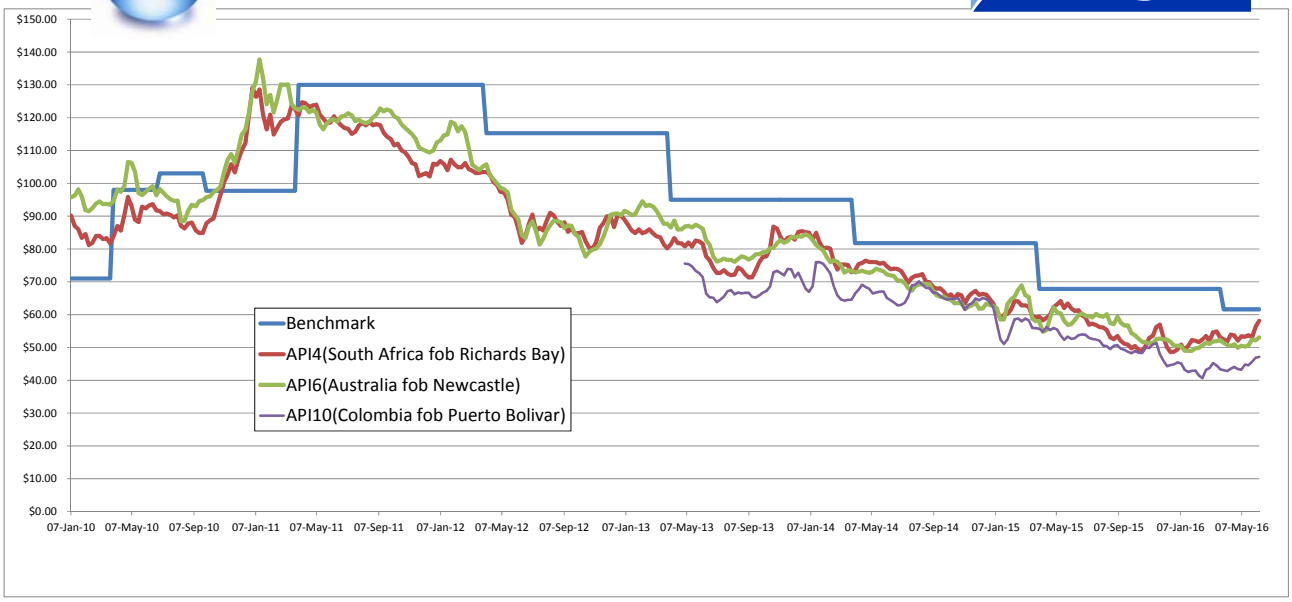
問い合わせ先

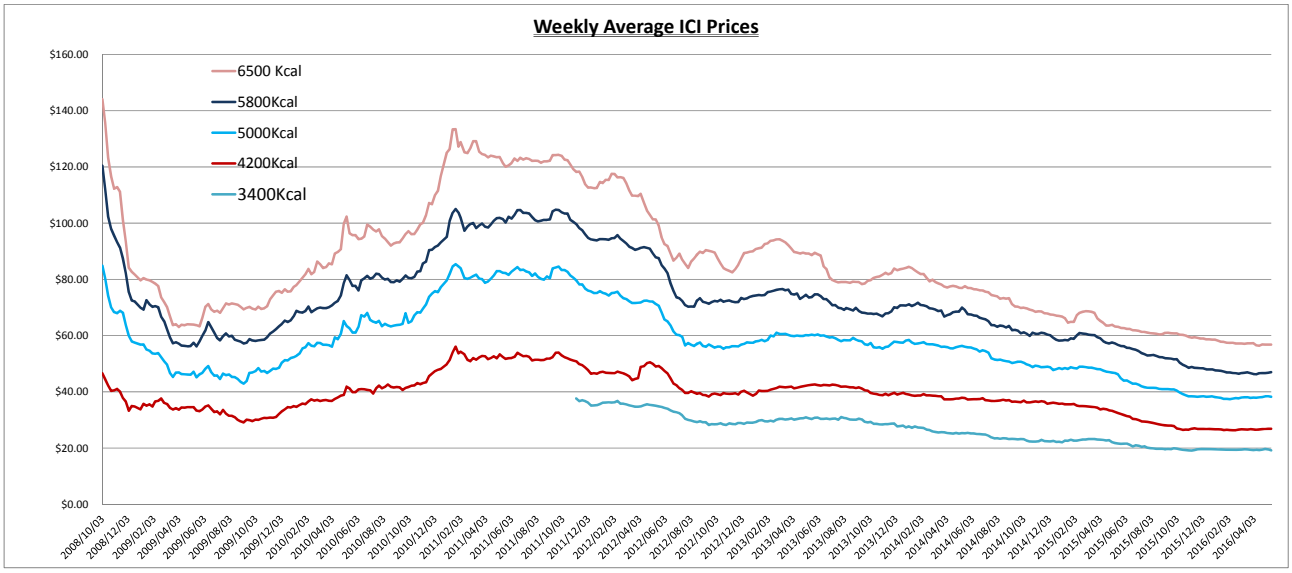
リードエグジビションジャパン株式会社

〈次世代〉火力発電 EXPO 事務局 thermal-power@reedexpo.co.jp

API INDEX

Argus/McCloskey's Coal Price Index





国際会議情報

XVIII International Coal Preparation Congress
Russia, 28 June-1 July 2016
Internet: http://icpc-2016.com/
Email: icpc-2016@icpc-2016.com

Coaltrans Korea
JW Marriott Dongdaemun Square, Seoul, South Korea, 14-15 July 2016
Internet: http://www.giievent.jp/eumo344326/

International Pittsburgh Coal Conference
Cape Town, South Africa, 8-12 August 2016
Internet: http://www.engineering.pitt.edu/pcc/

11th ECCRIA European Conference on Coal Research and its Applications
University of Sheffield, Sheffield, UK, 5-7 September 2016
Internet: http://www.maggichurchouseevents.co.uk/CRF/index.htm

2nd Coaltrans Japan
Hilton Tokyo, Japan, 29-30 September 2016
Internet: http://www.giievent.jp/eumo339369/

15th Annual Longwall Conference
Crowne Plaza Hunter Valley, Australia, 24-25 Oct 2016
Internet: http://www.longwallconference.com.au/

COAL-GEN 2016
Orange County Convention Center, Orland, FL, 13-15, Dec 2016
Internet: http://www.coal-gen.com/index.html

JCOAL 賛助会員募集

JCOAL は弊センターの活動にご賛同頂ける皆様からのご支援とご協力により、運営されております。
賛助会員にご入会頂き、事業や調査研究などにご参加頂けると幸いで御座います。
詳しくはホームページをご参照下さい。
http://www.jcoal.or.jp/overview/member/support/

賛助会員へのご入会・お問合せは
一般財団法人石炭エネルギーセンター　総務・企画調整部へ
TEL 03-6402-6100

※編集後記※

先の国民投票にて EU 離脱を決めた英国ですが、現在ウインブルドン(全英オープンテニス)の真っ最中であります。超の付く早起きの私は毎朝朝食を食べながら TV で試合を観戦しております。それで前々から気になっていたのですが、試合会場で試合中にキビキビとした動きを見せるスタッフ達。あの若者達は一体何者かしらと常々思っておりました。調べてみました所、ボールボーイ、ボールガールと言うスタッフで、試合の度に選別されてトレーニングを受けているようです。また、毎年申請を出すようなシステムになっているようです。ご興味のある方は因みにこちらのサイトです。https://www.aeltc.com/bbg/Default.aspx

(編集担当 お)

JCOAL では、石炭関連の最新情報を受発信していくこととしておりますが、情報内容をより充実させるため、皆様からのご意見、ご要望及び情報提供をお待ちしております。

次の JCOAL マガジン(189 号)は、2016 年 7 月中旬の発行を予定しております。

本号に掲載した記事内容は執筆者の個人見解に基づき編集したものであり JCOAL の組織見解を示すものではありません。

また、掲載した情報の正確性の確認と採否については読者様の責任と判断でお願いします。情報利用により不利益を被る事態が生じたとしても JCOAL ではその責任を負いません。

お問い合わせ並びに情報提供・プレスリリースは jcoal_magazine@jcoal.or.jp にお願いします。

登録名、宛先変更や配信停止の場合も、 jcoal_magazine@jcoal.or.jp 宛ご連絡いただきますようお願いします。

JCOAL メールマガジンのバックナンバーは、JCOAL ホームページにてご覧頂けます。

http://www.jcoal.or.jp/publication/magazine/

一般財団法人 石炭エネルギーセンター 〒105-0003 東京都港区西新橋 3-2-1
Daiwa 西新橋ビル 3F 電話 03(6402)6100 FAX03(6402)6110
購読のお申込みは⇒jcoal_magazine@jcoal.or.jp